

学生自主企画サマーセミナーの歴史

History of the “Summer Seminar” organized independently by students

中桐 貴生*
NAKAGIRI Takao*

1. はじめに 複数の大学から学生が集まり、農業農村工学（旧農業土木）に関わるあるテーマについて様々な角度から議論したり、お互いの研究活動について情報交換し合ったりする「サマーセミナー」という企画が、1996年以降ほぼ毎年、計16回にわたって持続的に実施されてきた。このサマーセミナーでは、その企画から、学会事務局への後援の要請や企画メンバーが興味を持った研究者への講演依頼などの各種交渉に至るまで、基本的な運営はすべて本学会の学生会員の間で代々引き継がれ自主的に行われてきた。学生によるこうした自主的活動は、現在、多くの学会において共通した課題となっている「学生・若手会員の活性化」への礎として期待される。また、筆者自身も学生時代にこのサマーセミナーの企画や参加を経験しており、現在、大学教員として、また研究者として活動する中で、その経験やその時構築された人的ネットワークが大いに役立っていると実感している。

本稿では、サマーセミナーが開催されるに至った経緯について概説した後、これまでに開催されてきた歴代のサマーセミナーについて整理し、その魅力や意義、参加する価値について紹介したい。

2. サマーセミナー開催に至る経緯 第1回目のサマーセミナーが開催されるに至った最も直接的なきっかけは、阪神淡路大地震（1995年1月17日）の発生後間もなく、当学会で立ち上げられた震災調査プロジェクトに参画した若手研究者によって開かれた座談会（Table 1）の中で、出席者からサマーセミナー開催の提案がなされたことにある。また、これとは別に、1992年に発足したスチューデント委員会（1992年発足）のメンバーだった先生方や学会事務局の方々等による学生会員への積極的かつ献身的な働きかけに対し、学生もうまく呼応し、当時普及しつつあったe-mailによる他大学の学生間での情報ネットワークの整備や、大会期間中における「若手懇親会」の開催および恒例化、学生会員向けの海外研修旅行などが実現されていく中で、他大学の学生同士の交流が活発化し、農業農村工学（農業土木）

という同じ専門分野の者同士で真面目に議論できる場への欲求が芽生えつつあったこともサマーセミナーの開催に至る大きな要因の1つになったと思われる。

Table 1 第1回目のサマーセミナー開催に至るまでの流れ¹⁾

年	月	日	サマーセミナー発足に強く関わる動き
1992	12		スチューデント委員会発足
1993	8	22	第1回海外学生研修旅行（～9/1、インドネシア）
1994	夏		宇都宮、東京、東京農工3大学合同ゼミナール
	7	20	第1回若手懇親会（全国大会@金沢 参加者約30名）
	8	22-27	第2回海外学生研修旅行（台湾）
1995	1	17	阪神淡路大震災
	3		阪神淡路大震災調査プロジェクト研究委員会（～1996年3月）
			学生通信員（岡山大、京大、東大、新潟大、農工大、三重）開始
	7	24	第2回若手懇親会（全国大会@宮崎 参加者約80名）
	8	18-26	第3回海外学生研修旅行（アメリカ）
	12	20	震災調査プロジェクトに参加した若手研究者による座談会①（京都）
1996	1	6	★震災調査プロジェクトに参加した若手研究者による座談会②（東京）
	6	18	第3回若手懇親会（全国大会@山形 参加者約90名）
	7	22-24	第1回サマーセミナー開催（宇都宮大学附属日光演習林）

*大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 Graduate School of Life and Environmental Sciences, Osaka Pref. Univ.

キーワード：学生自主企画、サマーセミナー、歴史

Table 2 過去に開催されたサマーセミナー

回数	年	期間	テーマ	会場
1	1996	7/22-24	実務と研究のはざままで	宇都宮大日光演習林
2	1997	7/31-8/2	地域資源の活かし方	日本大水上実習所
3	1998	7/24-26	農業土木と開発一人と自然との新しい関係を求めてー	鳥取大・砂丘の家
4	1999	8/5-7	農業土木について考える	POMPADOUR 油壺研修センター
5	2000	8/4-6	これからの農業土木ー20世紀に置いていくもの 21世紀にもつていくものー	鳥取大乾燥地研究センター・砂丘の家
6	2001	7/27-29	農業土木について	岩手大農学部
7	2002	8/8-10	愛知用水の歴史と現状	名古屋市
8	2004	9/9-11	農業土木の観点から北海道農業現状を知り、課題を探る	東川町
9	2006	8/10-12	水土里の樹が花拓く場所ー立ち枯れを防げー	日光林間学園
10	2007	8/30-9/1	安定と自由とー農業土木の今とこれからー	中国四国地区国立大学大山共同研修所
11	2008	8/28-30	八郎潟から考える農業土木の未来	秋田県立大
12	2009	8/6-8	未来の農業のために農業農村工学研究者が果たすべき役割とは？	筑波大
13	2010	9/2-9/4	未定	神戸大(淡路島見学)
14	2011	9/8-10	九州での農業工学の現状を知り、将来の農業工学のあり方について考える	九州大(諫早見学他)
15	2012	9/20-22	温故知新ー寒冷地農業の発展から見る農業土木の今・未来ー	北海道大(寒地土研他見学)
16	2013	9/6-9/7	霞ヶ浦への農業農村工学の関わりから農業農村工学のあり方を考える	東京農大(霞ヶ浦見学)

3. 過去に開催されたサマーセミナーの変遷 これまでに開催されてきたサマーセミナーにおけるメインテーマを Table 2 に整理した。テーマは、各回の企画担当者に関心を持ち、参加者間で議論したい内容を表現したものであるが、これらを概観すると、どの時代の学生も基本的には「農業農村工学（農業土木学）の歴史と、現在あるいは将来、それが果たすべき役割」について関心をもち、これらについて議論を交わしてしてみたいという想いを共通して抱き続けていることが窺われる。また、サマーセミナーに参加した学生数および大学数の推移（Table 3）をみると、第3回目～第6回目あたりで参加者数、大学数とも多く、それ以外では、多少の変動はあるものの、おおよそ安定した数値範囲内となっている。大学数はもう少し多くても良いように感じられるが、参加者総数は、筆者の経験上、1泊2日程度の期間でお互いに顔を見合わせながら内容的にも充実した議論を行うには20～30名程度である現状が最適と思われる。

Table 3 参加者数および大学数の推移

回数	参加者数(人)	大学数
1	24	9
2	25	8
3	27	10
4	34	11
5	40	12
6	23	10
7	14	9
8	12	5
9	19	6
10	14	3
11	23	4
12	19	4
13	9	2
14	34	7
15	31	7
16	21	6

4. おわりに サマーセミナーの魅力は、参加した人でないとわからない一種の感動のような感覚と充実感が味わえることであろう。筆者にとって、この感覚は今でも他では経験したことのない独特なものである。サマーセミナーなどを通じて、学生時代に仲良くなった人達とは、今でも大会や支部学会などで顔を合わせると気軽に声を掛け合うことができ、さらにその中の何人かは、研究上あるいは教育上で困った時には、お互いに情報共有しながら親身になって相談し合ったり、気兼ねなく日常的な愚痴を言い合ったりできる、何ものにも代えがたい存在となっている。また、サマーセミナーの企画で学んだノウハウは、大学で行事企画の担当を任された際に大いに役立っている。SNSが高度に発達し、物理的に離れた相手とも手軽にコミュニケーションが図れるようになった今でも、サマーセミナーの意義や参加して得られる価値は以前とあまり変わらないようである。²⁾

引用 1)中桐；学生自主企画サマーセミナーの発端，平成20年度農業農村工学会大会講演会要旨集 130-131。
2)宮坂ら；農業農村工学会サマーセミナー2012活動報告，水土の知 81(2) 125-128。